

(東京朝日新聞、昭和二年三月六日―九日)

(編者註、本文に入れたさし圖二葉は Kozlov, Excavations in Northern Mongolia 中から補つたものである)

莫斯科抄書の思い出

此の數日來なぶつて居る經世大典の站赤門、この寫本を引っぱり出すたびに、今からいへば二十二年の昔、モスコウの旅の空で、自分ばかりか他人をも煩はした活劇(?)の記憶がまさしくと蘇み返つて來る。一九一四年八月二十八日といへば、歐洲大戰の序幕に世界中の人氣が昂ぶり切つた時、殊にモスコウではツアールがペチエルブルグから行幸して、宣戰理由を布告した後間もない時で、レンネンキャンプが陣を引いたとか、日本の兵隊や武器がここを通つて戦線に向つたとか、噂が噂を作るに忙しく、仕事などは殆んど手につかぬ時である。ペチエルブルグから自分がこゝに着いたのは、この日の朝であつた。露都から日本に歸る途を態々モスコウに寄り道した主要の目的は、この地のルミヤンツェフ博物館に既に亡佚した經世大典の站赤即ち驛傳門の寫本が藏せられて居ることを、或る書物によつて豫てから知つて居たので、この度の訪露を機會にどうにかしてそれを見しあはよくば、寫し取つて携へ歸りたいと思つた爲で當時のこんな興奮し切つた雰圍氣とは、凡そそぐはないものであつた。それで「アル